

想像と現実のギャップ

■街灯要望を参考に

市民の皆さんから多数寄せられる要望の一つに、「街灯が暗い」、「街灯が足りない」というものがあります。私自身がこの声を直接伺いすることもありますが、毎年の各町内会から上げられる要望の中で見ることもあります。

これら要望に対して市はすぐに現場確認をし、電球が切れていたりすれば直ちに交換しています。ただ、職員が夜間に現場を確認しても、その多くが既定の明るさであったり、街灯の数も設置基準を満たしていたりする場合がほとんどです。

■ちよつと考えてみると...

とは言え、街灯の数が足りない場合もあるかもしれません。ですが、それだけではない食い違いの原因があるはずで、何であるか、正直今もはっきりとはわかりません。ですが、最近一つの仮説に行き着きました。そのヒントになったのは若者のスマートフォンでした。

ご年配の方々にお聞きします。若い人が操作しているスマートフォンの画面を見たことがありますでしょうか。お子さんやお孫さんのスマートフォンの画面を見てみてください。きつと驚くと思いません。暗いのです。

「あなたたち、よくまあそんな暗い画面で見えるね」と私が声をかけても若い人たちはキョトンとしたままです。彼らにすれば当たり前すぎて私の言っている

ことが理解できないのです。そのときわかったのです。年齢によって見える光の量に違いがあるのだと。実際、調べてみると、若者と高齢者の光吸収率の差は4倍もあることがわかりました。

街灯の話に戻ります。「街灯が暗い」などの声を寄せる方の多くが比較的年齢の高い人たちです。他方で現場確認する職員は若い人です。同じ現場であっても高齢の人たちと若い人たちでは見え方が違うのです。土台として、意見が合うわけがないのです。

■設置基準

街灯設置には当然のことながら基準があります。たとえば、住宅街における防犯灯と呼ばれるものは、40W(LEDは10・20W)のものを概ね50m間隔で1基設置することとなっています。

市内には4,584基の防犯灯があります。電気代を含めた維持費に年間約4,600万円かかります。最近の世界情勢から今後さらなる上昇が見込まれています。とは言え、安全で安心な市民生活を確保するうえで、この部分を安易にカットしてはなりません。ではどうすべきなのでしょう。

市としては、これまでもいろいろと試行錯誤してきました。ポイントの原因の捉え方や視点を変えて考えてみるのだと思います。そのための一つのヒントが今回の話です。

■「理想と現実のギャップ」

このコラムを書いているうちに、4年前、私が市長に就任してすぐに職員に向けて行った訓示を思い出しました。それはEテレの番組ピタゴラスイッチで取り上げられたテーマ「想像と四角い穴」を題材にした内容でした。その概要を紹介したいと思います。

四角い穴が開いたテーブルとサイコロがあります。穴はサイコロよりちよつと大きいくらいです。このサイコロを穴の方に滑らせて行きます。さて問題です。滑らせたサイコロは穴の中にストンと落ちるでしょうか。

答えは「落ちない」です。

穴に入る直前にサイコロは傾き穴に引っかかってしまうのです。つまり、想像に反してサイコロは落ちないというのが現実なのです。人は想像したことを結果に簡単に結び付けてしまいがちです。それはプロセスを見ないで判断した方が楽だからです。ですが、実際は結論に至るまでのプロセスの中に真実が隠れていたりします。多くの新たなアイデアや本当の答えは汗をかきながらの試行錯誤の中から生まれてくるのです。



にかほ市長
市川雄次

市政運営から日常の出来事まであらゆるテーマをコラムにしています。過去のコラムは市HPからご覧になれます。

